

巻頭言

「新しい年を迎えて」

理事長 新谷 友良

明けましておめでとうございます。旧年中はいろいろお世話になりました。今年もよろしくお願いいたします。

平成が4月で終わり、5月からは新しい元号となります。昭和が終わって平成に変わるときは、仕事でインドネシアのジャカルタにいました。ホテルのボーイが「日本のテンノウが亡くなった、悲しいことだ」と知らせてくれました。そのあと数日して帰国すると、日本は新しい元号になっていました。

平成になり、阪神・中越・東北・熊本・北海道と大きな地震が続きました。昭和は戦争が年譜を刻みましたが、平成は災害が年譜を刻んだように思えてなりません。地殻や大気の変動、天体の動きの変化がもたらす地震や風水害に私たちは無力です。無力な中で、災害への精一杯の備えをし、被った災害の中で、助け合って生きていくしかありません。新年にふさわしくはありませんが、新しい元号を考えると死んでしまった人と今生きている人、これから生まれてくる人とのつながりをついっ考えてまいります。

11月、山口・下関で開催された全難聴福祉大会の第1分科会「最後まで自分らしい人生を送るための終活とは？」で、座長を務めました。女性部担当の分科会でしたが、男性の参加が多くありました。講師のお話のあと、パネルディスカッションをしましたが、皆さま身内の体験を踏まえた大変実感の伴った話をされました。参加者の方からも多くの発言がありましたが、高齢の男性の方は、お子さまを亡くした体験を踏まえ、「人が死ぬということは、一人が死ぬだけにとどまらず、家族・友人・知人を巻き込む。個人の終活ではなく、みんなで死を共有したい」と話されました。

9月で終わったNHKの朝の連続ドラマ「半分、青い。」の脚本を書いた北川悦吏子さんが日経新聞11月26日のコラムで、自分の深刻な病気のことを一番の親友に打ち明けて、「もう死にたい」と言ったら、彼女から「私のために生きてくれ、と言われた」と書いています。「そうか、彼女のために、生きてみるか、と私は思った。ずっと、自分は自分のために生きている、と信じていた。でも、最後の最後には、人のためにしか生きられないのかもしれない、と思った」と北川さんは文章を締めくくっています。

元号が変わることを考えていて、新年を寿ぐにはふさわしくない「戦争」、「災害」、「終活」、「死」などの言葉を並べてしまいました。改めて、新しい年がすべての人に良い年であることを祈願しております。